

# シカゴ学派の都市社会学と 近隣・コミュニティ

—その伝統に関する若干の考察—

内 藤 辰 美

## はじめに

「シカゴ学派の社会学」「シカゴ学派の都市社会学」の存在を認めた場合、その始祖を、それぞれ、スモール (A.Small) とパーク (R.E.Park) に求めることには同意が得られるであろう<sup>1)</sup>。

シカゴ学派の都市社会学には「伝統」と言えるものがあるのか。あるとすればそれは何か。私が、ここで伝統というのは、極めて限定的なものであって、「シカゴの社会学的研究は、1916年の『アメリカ社会学雑誌A.J.S』中に発表されたパーク博士の著書、The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environmentという一論文から始まった」(Burgess & Bogue 1973: 45)と言われる。シカゴ都市社会学の始祖パークとパークの指導下に行なわれた研究を念頭においた場合、シカゴ学派の都市研究には確かな継承が認められるものであろうか、認められるとすればどのような形で継承されているのであろうか、その一点にある。

シカゴ学派の都市研究を生みだした背景には発展する都市シカゴがあった。パークの論文から100年を経た今日、都市シカゴのさらなる発展が、新しい都市研究の出現を刺激してきたとしてもおかしくない。都市が変容し、都市をめぐる社会学にも変化が現れることは容易に想像されるところである。アメリカのみならず日本の都市社会学にも影響を与えてきたシカゴ学派の都市社会学について、その伝統がどのように継承されてきたのか、この、すでに語り尽くされているようにも思われる問題の検討は、パークにはじまるシカゴ学派における都市社会学の特質を理解し、都市社会学史におけるシカゴ学派の位置を定める上で、さらには今後における都市社会学の発展的な在り方を考えるためにも、欠くことのできない作業である。

## 1. アメリカ大都市の変容と近隣

以前、松村岐夫は次のように書いている。「ふりかえってみると、アメリカの都市行政は、近隣に対してだんだん関心を失ってきていた。近隣の権利と役割を少しずつ奪って市役所に集中してきたのがこの半世紀の歴史だったといってよい。大都市の周辺の自治体は合併によって政治権力を奪われて大都市の一部をなす近隣住区にすぎなくなった。貧困な近隣を政治に結びつけていたボス体制は打破されて、権力はフォーマルな制度に統一された。このようなフォーマルなシステムになっても、専門的行政を上手に使っていける有力な近隣住区は満足を与えていたといえるかもしれない。しかし、行政的配慮のゆきとどいていない近隣住区の不満が、近隣政府の考え方に近親感をもつ傾向があるようである」(松村 1972: 24)。松村が指摘するように、アメリカでは大都市の時代になるにつれ近隣の機能に変化が生まれてきた。行政による都市の管理が進み、都市の近隣は次第に機能を低下させてきたからである。コトラー (Kotler M.) などに見られる近隣政府 (Neighborhood Government) への期待は、ある意味で、行政による都市の管理という事態の裏側にある。逆説的な表現だが、近隣の衰退が近隣の復活＝近隣政府 (近隣自治) への期待を招いているとみることができるのである<sup>2)</sup>。

近隣・コミュニティの変化は近隣とコミュニティに新しい研究を求めることになった。その動きはシカゴ学派の都市社会学にも現れている。シカゴ学派の都市社会学は、パーク以来の近隣・コミュニティ研究を受け継ぎながら、近隣・コミュニティの研究に新しい視点を用意することになった。ジャノヴィッツ (Janowitz M.) の有限責任のコミュニティ (community of limited liability) やサットル (Suttles G.) の防衛的近隣 (defended neighborhood) がそれである。バーナードは指摘する。「人びとが分散したいくつかの社会体系に分布している状態は、単なる空間的状态にとどまらず、〈心理的〉状態である。……一団の人びとがある空間的地域の中にもいるとしても、しかし、それがかれの社会的世界だというわけではない。地域性の概念はこの文脈においてはほとんど意味をなさない。〈共同性〉 (communality) の概念は、かつてこれらの地域の自立的関係を指示するために提案されたのであった。だが今や、こうした新しい種類の関係によって示されるように、地域性から独立したコミュニティの意味が優勢になりつつ

ある」(Bernard 1930 = 1978: 1)。ジャン・ヴィッツやサットルの研究は、後に詳しくみるように、このバーナードの問題意識と重なるところがある。

近隣・コミュニティの変化を導いたものは何か。もっとも大きな要因は「成長連合」=アメリカ資本主義が発展に向けて作り上げた資本と政治権力の合体勢力(アラン・ウルフ)が中心となって練り上げた都市政策である。1949年の住宅法こそ成長連合が肝煎りで実現した法律(政策)であり、その狙いは近隣・コミュニティを含む都市構造全体の作り替え=都市の再開発であった(Wolf 1982)。

都市の再開発はしばしば近隣住民の意向や価値を無視して進められ、その結果、近隣住民の抵抗や反対運動に直面した(Gans 2006; Anderson 1971: 62)。権力に抵抗する近隣の組織化が起これ、権力に対抗する動きが生じた。シカゴ・ウッドローン地区においてアリンスキー(Alinsky S.)が主導した近隣・コミュニティの組織化運動もそのひとつである。彼は資本や行政、またそれに同調する既成の勢力に対する抵抗を意図的に創り出し、近隣における自己組織化を推進した。そのための住民組織がTWO(ウッドローン・オーガニゼーション)であった。アリンスキーは近隣を組織化し闘争的なものとする中で、資本とシカゴ市長リチャード・デイリーが中心となって進める近隣・コミュニティ支配と決別・対決しようとしたのである(内藤 2011)。

かつて「社会事業は組織された宗教にその根を持ち、そこから最初の着想を得た。多くの点で宗教と社会事業は、ときに重大な、また、さして重大でない不和や緊張が生じたにもかかわらず、何年にもわたってこのつながりを保ってきた」(Sherard & Muray 1975: 208-9)。しかし、この何年にもわたってつながりを保ってきた宗教と社会事業の関係に揺らぎが生まれしてきた。バーナードの説明である。「教区の基本的概念は受持ち地区であるが、しかし今日、その範囲で運営されているものといえば下水溝以外には何もない。もしわれわれが共通の利害をもつ人びとを、地理的偶然性を基準として区分したとして、われわれは一体かれらをどのように集合させ、関係づけることができるのだろうか」(Bernard 1930 = 1978: 243)。教会は受けもち地区の弱体化に危機を覚え、ジャングルと言われた地区の組織化に経験を持つアリンスキーに近隣の組織化を要請した。教区に近隣・コミュニティの組織化が必要だと認識させたのは、教会に対する人びとの関心の薄らぎであり、権力=行政の前に無力化する近隣の存在であった

(Arnold 1979; Dennis 1984)<sup>3)</sup>。

## 2. パークとシカゴ学派の都市社会学

自立的発展の軌道を追及するアメリカはヨーロッパと一線を画した独自の知的世界を追及した。そうしたアメリカの科学的自覚は社会学にも現れる。パークのシカゴ学派もそのひとつであった。パークを中心とするシカゴ学派の都市社会学は、伝統的なアメリカの社会学からの決別を意識して独自の発展を志向する。「パークは、当時ハイデルベルグ大学で学位を獲得した新進でシカゴ大学の社会学講師の地位にあったが、一面においてスモールの社会過程論の影響をうけながら他面においてはその影響より離れ、独自の立場でコミュニティの新しい研究方法を具体化しようとしていた。トーマスとパークの注目すべき努力は、当時まだヨーロッパの特にスベンサア社会学の影響から脱却していなかったウォード、ギディングス、スモールなどの一般化的社会学に対して、真にアメリカが生んだ現実的 sociology を育成しようとする自覚の運動であった。…(中略)…中西部地域社会の科学的自覚がアメリカ独自の社会学的方法を要請し、これに呼応して社会的、生態学的研究活動がシカゴ学派を拠城として発展したこと自体、すでに一つのダイナミックな生態学的現象を呈示しているといえることができる」(早瀬 1949: 32-3)。

このアメリカ独自の社会学を求める動きは、シカゴ学派の社会学に変質をもたらした。コーサーは云う。「創設期の社会学者たちが、自らを社会改良家であるとみなし、彼らの読者層にたいして改良家としてはたらきかけ、闘争状況にたいして注意を促したのに対し、次の世代の社会学者たち、とりわけシカゴ学派の後継者たちは、みづからを改良家とみなしたり改良家の支持層に訴えかけたりするどころか、公的および私的な官僚制度における意思決定者の間で発言の機会を得ようとした。彼らは、闘争よりもむしろ適応の問題に、社会動学よりも社会静学に、もっぱら関心を集中させた。初期のアメリカの社会学者たちが闘争を志向する集団—弁護士・改良家・急進論者・政治家—を自らの支持者とみなして語りかけたのにたいし、後期の社会学者たちは、もっぱら、共有価値を強化し、集団闘争を極小化することに関係している集団や職業団体、すなわち、ソーシャル・ワーカー、精神衛生の専門家・宗教的リーダー・教育者・ならびに公的・私的な管理者などのなかに、自分たちの支持者を見出した。この変化にと

もない、社会学者の多くの自己イメージは、改良への自覚的主張という。それから、人間関係の「調停者」および人間関係の専門家という自己イメージへと変化した」(Cosser 1973: 3-23)。コーサーの理解について、誤解のないように言えば、パークらシカゴ学派の社会学者が社会改良に後ろ向きであったわけではない。パークは人種問題をはじめアメリカには未解決の社会問題があり、至るところに社会の改良を求める事態があることを十分認識した。しかし、彼はそれ以上に、社会学の科学化に意欲的であった。パークは、社会問題の克服と社会改良を科学的に追及しようと試みた(内藤・佐久間 2015)。

社会改良の必要を意識し、社会改良に社会学を通じて迫るという姿勢はスモール以来シカゴ社会学における伝統であった。パークは社会改良の必要を肯定しながらも、スモールに同調しなかった。何故か。両者は社会学をめぐる「科学観」を異にした。パークは、社会を単に社会的概念で説明することに満足しない。社会学は、単なる解釈を超えて、社会を実証的に仮説構成的に追及するものであった。パークとバージェスの共編による大著は、アメリカ社会学の成果を整理することを通じて、新しい科学としての社会学を構築しようとした意欲的な試みであった。それは、Introduction to the Science of Sociology (1921) という書名が示すように、即ち、社会学の科学への案内というタイトルが示すように、社会学の「科学化」を追及する作業であった。すでにスモールには、ヴィンセントとの共著、Small A. & Vinsent G.E. “An Introduction to the Study of Society” (1884) があり活用されていた。パークとバージェスはそれを十分認識したうえで社会学の科学化=実証化に固執した。スモールもパークもドイツで学び影響を受けている。スモールはドイツでの研究から社会過程という概念を継承し、パークも社会過程の概念を重視した。しかし、パークはスモール以上に、社会学の科学化を意識した。Introduction to the Science of Sociology は必然性をもって編まれたのである。

社会学の科学化を通じて社会問題の解決に貢献するというパークの意欲は、彼が強い関心を寄せた人種関係や民族問題によく示されていたが、それ以上に、シカゴ学派の都市研究に主導的役割を果たした論文、「都市」に現れていた (Park R. E. “The City – Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment –”, A.J.S. March 1916)。それに続く、バージェス (Buragess E.) の「都市の発展 – 調査計画序説」(Buregess E.W.

“The Growth of the City”, in Park, Burgess The City, Univ. of Chicago Press, 1925) や、ワース (Wirth L.) の「生活様式としてのアーバニズム」(Wirth L. “Urbanism as a Way of Life”, A.J.S. vol.44, 1938) も、パークの方針に従って、都市に関する科学的社会学の樹立を求めて書かれた仮説的論文である。この仮説構成的な実証研究 (パークが考える科学的社会学)こそ、スモールの社会学とパークの都市社会学の分岐をなす決定的な違いであった。

パークが都市の分析枠を提示してから20年が経過した1936年、後の都市研究に、大きな影響を与えるもう一つの画期的分析枠＝仮説が誕生する。Wirth L.の論文“Urbanism as a Way of Life”, A.J.S. (1936) がそれである。ワースはアーバニズムとアーバニゼーションの仮説を掲げてパークを超える、あるいは新しい時代の要請する研究枠を提起しようと試みた。「体系的なアーバニズムの理論にもっとも近いものは、ウェーバーの論文とパークの忘れられない論文、〈都市—都市的環境における人間行動の研究方針〉のなかにみいだすことができる。しかし、これらのすぐれた業績でさえも、その上に立って調査がおこなわれるところの、秩序ある・首尾一貫した理論的枠組みの構成からは、程遠い」(Wirth [1965] 1978: 133)。このワースの功績は、焦点をアーバニズムに求め、都市の概念に彼独自の定義を持ち込みながら、アーバニズムの発展・拡大を説明する視点、都市化という動態視点の必要を提示したことである。

### 3. シカゴ学派の衰退と再興——Janowitz M. と Suttles G.

シカゴ学派の社会学は、1892年にロックフェラーとバプティストの支援によってシカゴ大学が開学し、そこに社会学部門が創設されたことに起源をもっているが、その後のシカゴ学派の都市社会学は低迷状態にあった。シカゴ学派の伝統を復活させることに力を尽くしたのはジャノヴィッツ (Janowitz M.) である。「疑いもなく、第一次シカゴ学派の最も勤勉な回顧的な創造者は、ジャノヴィッツであった」と、アボットは述べている (Abbott 2011: 25)。ジャノヴィッツは、1962年にシカゴ大学に戻り、パーク以来のシカゴ学派の伝統、都市社会学とコミュニティ研究を復活させていく。グリアがそれを後押しし、ジャノヴィッツを支持するサトルの近隣研究も現れた。もちろんジャノヴィッツは、コミュニティ研究の伝統を復活させるにあたりパークやワースらの研究を受動的に継承したわけでは

ない。ジャノヴィッツによれば、パークやワースの研究方針は、現実に照らした場合、修正を要とするものであった。彼は、先人の研究が十分評価されるべきものであることを認めながら、その理論＝仮説が必ずしも現実をとらえていないと認識した。彼はシカゴ学派の伝統である都市とコミュニティへの関心を継承しながらも、都市やコミュニティにパークやワースとは異なる視点、歴史的現実を踏まえた新しい視点の必要を意識したのである。

ジャノヴィッツはシカゴ学派の再建を、シカゴ学派の伝統であるコミュニティ研究に求めたが、彼がシカゴのコミュニティ研究を通じて発見したのはかつてパークが発見した「自然地域」とは性格を異にする「有限責任のコミュニティ」(community of limited liability)と呼んだ新しい形のコミュニティであった。パークとジャノヴィッツは、ともに、コミュニティに関心を寄せて都市社会学の構築を試みた。けれども、二人が発見したコミュニティは都市シカゴの成長を反映して、異なるものであった。パークのみたコミュニティとは異なり、ジャノヴィッツのみたコミュニティはかつての移民のコミュニティを典型とするような濃密で累積的な社会関係をもったコミュニティと別物であった。コミュニティは一枚岩のトータルな存在から、パーシャルで多元的な、柔軟な関係を通じて形成されるものに姿を変えていたのである。グリアも主張した。「いまやコミュニティはコミュニティを包む大きな社会の一部に過ぎなくなっていて、今日のコミュニティはその成員をコミュニティに閉じ込めることができない」(Greer 1970: 82)。ジャノヴィッツの記述である。「コミュニティの住民は彼がコミュニティに費やす以上の成果を期待しており、コミュニティが彼の期待に応えてくれないとみるや彼はコミュニティから遠ざかるのである。その意味でコミュニティの住民がコミュニティにかかわるかかわり方は有限(限定的)である。いまや、コミュニティは官僚的な装置でもなければ非人間的な装置でもなく、住民の心理的・社会的影響の下にあるのである。「有限責任のコミュニティ」という概念はそうした現実を反映して提起されている」(Janowitz 1967: 211)。

しかし、このコミュニティにおける変容は、コミュニティが消失したことを、あるいは、コミュニティが有用性を失ったことを意味していない。バーナードが、ジャノヴィッツの一文、「地域社会研究は今もメトロポリタンの状況を全体的かつ包括的に理解するための基礎的容器である」とい

う指摘を引きながら、「近代生活が地域社会を消し去ってから随分たつが、しかしそれは以前にもまして地域社会を必要とするに至った」(Bernard 1930 = 1978: 246) と主張していることを記憶にとどめたい。

ジャノヴィッツの研究＝シカゴ学派の再興は、パークやワースのシカゴ学派の研究を踏まえつつ、一方における「自然地域」が解消の方向にある現実(パークの限界)と、他方、都市化が一様に地域の解体やゲゼルシャフト化を来すわけではないという現実(ワースの限界)によって突き付けられていた壁を越えようとするところから出発したものであった。その意味で、ジャノヴィッツの試みは、パークからワースというシカゴ学派における都市研究の二大仮説の修正を意図した新しいコミュニティと都市の研究であった。ワースの仮説に対する修正は、都市主義の再考を超えて「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」(テンニース)に対する再考をも求めることになる。ワースの都市主義的理解にはテンニースへの過度の傾斜があったという認識である(Etzioni 1959: 37)。そこにおいては、ワースのアーバニズムの直線的・単線の見方を超える試みが必要であった。ジャノヴィッツとサットルがスチュワートの多系進化に注目を促したのはそのためであった(Suttles & Janowitz 1979: 157; Steward 1955)。

ジャノヴィッツとサットルに共通するのは近隣とコミュニティが、かつての濃密な包括的關係から解放されているという認識である。ジャノヴィッツとサットルは、コミュニティと近隣が古典的な形ではなく、現代的な形で機能し、存続していることを確認した。有限責任のコミュニティや防衛的近隣はコミュニティや近隣が残余なものでないことを教えている。彼らの見るところ、それは、住民が、都市化に対しボランティアティックに適応する、社会的構成なのである(Suttles & Janowitz 1979: 159)。ジャノヴィッツやサットルらは、これまでの近隣・コミュニティとは異なる近隣・コミュニティの存在に注目し、アーバニズムによって地域性が消滅するとみるワースの主張にも修正を求めている。そして、彼らは、シカゴ学派の都市社会学がパークやワースの偉大な研究を受け継ぎながらも新しい伝統として再生されなければならないと考えている。

もちろん、ジャノヴィッツやサットルの研究がパークやワースの研究と断絶しているとみるのは早計である。私見によれば、ジャノヴィッツやサットルは社会改良への直接的コミット、あるいは社会的な運動への直接的なコミットから距離を置き、その努力を都市の科学的解明に集中させて

いる点でパークやワースに通じている。そこに窺われるのは、経験的研究とそれを通じた社会的問題の解明であって、急進的な人びとが目指す運動や政治とは一線を画す姿勢である。

## おわりに

小論は、シカゴ学派における都市社会学の特質、伝統とも言える特質を解明・確認しようとするものであった。かつて、全米に影響を持ったシカゴ学派の都市社会学も衰退を経験する。ジャノヴィッツとサットルの試みは、近隣とコミュニティ研究の社会学とするシカゴ学派の伝統を復活・再生させようとする企てである。彼らは新しい形のコミュニティ（ジャノヴィッツ）や近隣（サットル）を発見し、シカゴ学派の伝統とも言うべき実証の精神を堅持した。コミュニティと近隣が現代的な形で、パークの時代と異なる形で機能し、存続していることを発見したのである。

1960年代以降、アメリカでは白人の郊外への逃避が目立ちはじめ、中心都市の衰退が顕著であった。都市の再開発が近隣、民族コミュニティの解体を促し、研究者の視野から遠のいた時期、ガンスは崩壊する近隣と民族コミュニティに関心を寄せていた（Gans 2006）。ガンスは都市再開発による近隣の解体が住民の意思や価値に基づくものではなく、特定の民族・階層の価値＝利害によるものであることに注意を促した（Gans 2006; Zukin 2013）。ガンスの研究は、直接、近隣政府を念頭においたものではない。ズーキンが言うように、それは、「地域のエリートたちがウエストエンドの労働者階級のイタリア人の居住地で必要もない破壊を行なっていたかを告発する文書」（Zukin 2013: 23）であった。しかし、間接的に、近隣政府の必要性に一つの示唆を提供することになったと言えよう。

近隣自治＝近隣政府に対する、より大きな、あるいはより直接的な同調圧力は、アリンスキーらの近隣・コミュニティを組織化して、都市再開発に対抗した闘争であった。コトラーはアリンスキーらの闘争に一定の理解を示しながらも、そうした闘争が実質的成果を生まないと認識した。コトラーに言わせれば、近隣はアリンスキーの云うような軍事的闘争の組織や単位でなく政治的組織・単位であった。近隣がもっぱら闘争のために組織されることを回避し、行政と近隣・コミュニティの間に、近隣問題を「政治的」に解決するという認識＝合意を形成するためには、言葉を換えて、対立的な状態にあるアメリカの都市を混乱から救済するには、近隣・コ

コミュニティに問題解決の主体性を持たせ、近隣・コミュニティに主体的な管理能力を与えることこそ急務であると判断されたのである (Kotler 1968 = 1975, 1969; 内藤 2011)。コトラーはアリンスキーにおける地域組織化の手法を批判する一方、アリンスキーが訴えた近隣独自のガバナンスを認め、近隣政府の必要を提唱した。コトラーの発想に従えば、近隣政府の必要は自然の成り行きであった。そして、近隣に与えられている一般的理解、すなわち、近隣を地理的・文化的なものとする理解は修正されなければならないものでもあった。彼は、自己の主張に一貫性をもたせるため、近隣の本質が、政治的であり、本来、近隣は政治的単位として形成されていると主張する。彼は、そこから、パークのような理解、近隣の本質を地理的・文化的なものだとする見方を否定する。パークは近隣が絶えず政治的問題に曝されていると見ながらも、基本的に、近隣を「社会的・地理的」なもののみでいたのに対し、コトラーは近隣を、基本的に、「政治的」単位と見て、そもそも近隣はその始まりから政治的＝運動的なものであるとみなすのである。近隣の本質を政治的なものに求めるコトラーの主張の根底には、彼の近隣政府の必要を説く立場がある。そう推察することが可能である。

ここにおける私の関心は、そのことよりもジャン・ヴィッツやサットルらの研究がコトラーのような近隣政府の建設＝運動に向かわず、実証的な研究に向けられていたことにある。その違いは運動や実践に重きをおくか、実証に重きをおくかの違いと言ってもよい。パーク以来のシカゴ学派がスモールに決別し社会改良運動から科学的社会学へと学派を展開させた歴史、コーサーの厳しい指摘は、「みずからを改良家とみなしたり改良家の支持層に訴えかけたりするどころか、公的および私的な官僚制度における意思決定者の間で発言の機会を得ようとした歴史」(前出)に、実践的・運動的であるよりは実証的な奉仕を重視する歴史にあるのではないか。彼らは、パークやワースがもっていた社会学＝社会学の科学化という伝統を堅持し、社会運動との距離を意識する。資本や行政の「成長連合」と対峙し、近隣の組織化を進めたアリンスキーや近隣政府の創出という運動＝実践を優先させるコトラーのような人びとは、近隣やコミュニティに関心を寄せるという点で同じであったが、近隣・コミュニティを取り上げる目的と手法を異にした。この点はシカゴ学派における都市社会学の特質を理解する上で極めて重要なところであり、都市社会学の研究史におけるシカ

ゴ学派の位置を定めるためにも記憶されるべきところである。パークラシカゴ学派の都市社会学は、その科学観を含めて、批判的に発展させられることが望ましい。

シカゴ学派の都市社会学における「中興」の祖、ジャンヴィッツは、コミュニティが「有限責任化」している事態を発見し、実証主義の精神を堅持しながら、シカゴ学派のコミュニティ研究を復活させ、シカゴ学派の伝統を継承・発展させてきた。しかし、有限責任のコミュニティという形態をもってコミュニティの本質と認めてよいものかどうか。それは、コミュニティの本質や今後のコミュニティ研究のあり方とは別の問題である。私見によれば、コミュニティに理想のあり方（文化的目標）を設定・追求する試み、運動や実践を意識したウォード的な研究はあってよいし、その論議の中で、コミュニティの本質に関する古典的理解、マッキーヴァーの理論を含めた研究には活用があってよいように思われる。

#### 注

- 1) シカゴ学派という言い方は、通常、ルーサーL・バーナードの1930年の論文「社会学の学派」(Bernard 1930 = 1978)によるものとされる (Abbott 2011: 10)。
- 2) こうした動向はアメリカにおける近隣研究にも現れる。1950年代から1960年代にかけて、社会学者や政治社会学者の近隣やローカルな関心は後退したといわれている (David 1975: 3)。
- 3) アーノルドによれば、近隣への再評価を打ち出したのは近隣を国家的な資源として評価するカーター政権のNCN (National Commission on Neighborhoods) であった (Arnold 1979)。

#### 引用文献

- 秋元律郎, 2002, 『現代都市とエスニシティ——シカゴ社会学をめぐる』早稲田大学出版部。
- Abbott, A. (=松本康訳), 2011, *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred* (=『社会科学と社会学——シカゴ社会学百年の真相』ハーベスト社.)
- Anderson, M. (=柴田徳衛・宮本憲一監訳), 1971, *The Federal Bulldozer: A Critical Analysis of Urban Renewal* (=『都市再開発政策』鹿島出版会.)
- Arnold, J., 1979, "The Neighborhood and City Hall in Baltimore, 1880~1911," *Jour-*

*nal of Urban History*, No.6(1) November.

- Bernard, J. (=正岡寛司訳), 1930=1978, *The Sociology of Community* (=『コミュニティ論批判』早稲田大学出版会.)
- Burgess, E. (=奥田道大訳), 1978, *The Growth of the City* (=「都市の発展——調査計画序論」鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房.)
- Burgess, E. ed, 1964, *Contribution to the urban sociology*, Univ. of Chicago Press.
- Burgess, E.W. & Bogue, D. J. (=大坪省三訳), 1973, *Research in Urban Society* (「都市社会の調査研究——その総括」奥田道大編『現代のエスプリ：現代都市論——現代日本の都市とコミュニティへの序説』至文堂.)
- Buell, E. H., 1980, “Busing and the Defended Neighborhood—South Boston: 1974-1977, *Urban Affairs Quarterly*, 16(2), December.
- Coser, L. (=新睦人訳), 1973, *The Functions of Social Conflict* (=『社会闘争の機能』新曜社.)
- Dewy, R. (=倉田和四男訳), 1978, *Neighborhood: Urban Ecology and City Planners* (=「近隣・都市生態学・都市計画化」鈴木広訳編『都市化の社会学(増補)』誠信書房.)
- Etzioni, A., 1959, *The Ghetto-A Re-Evaluation*, *Social Force*, 37, march.
- Gale, D. E., 1984, *Neighborhood Revitalization and the Postindustrial City*, D. C. Heath and Company.
- Gans, H. (=松本康訳), 2006, *The Urban Villagers: Group and Class in the Life of Italian-Americans*, Free Press (『都市の村人たち——イタリア系アメリカ人の階級文化と都市再開発』ハーベスト社.)
- Greer, S. (=奥田道大・大坪省三訳), 1970, *The Emerging City: Myth and Reality* (=『現代都市の危機と創造』鹿島出版会.)
- 早瀬利雄, 1949, 「社会生態学の基本問題」東京社会科学研究所『季刊社会学3』同文館.
- 宝月 誠・中野正大編, 1997, 『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣.
- Janowitz, M., 1967, *The Community Press in the Urban Setting*, Univ. of Chicago Press.
- , 1968, *The Social Order of the Slum*, Univ. of Chicago Press.
- Kotler, M., 1968, *Spiegel (ed) Citizen Participation in Urban Development* (=田村明他訳, 1975, 「近隣住区でどれだけコントロールするか」『市民参加と都市

- 開発』鹿島出版会.)
- , 1969, *Neighborhood Government—The Local Foundations of Political Life*, The Bobbs- Merrill Company, Inc.
- Lengermann, P. M., 1979, “The Founding of the American Sociological Review: The Anatomy of a Rebellion” *American Sociological Review*, vol.44, April.
- Mckenzie, R. D., 1970, *The Neighborhood: A Study of Local Life In The City of Columbus*, Ohio, Arno Press Reprint Edition.
- Michelson, W., 1975, *Man and His Urban Environment: A Sociological Approach* (= 栄久庵祥二訳, 1975, 『住環境計画——街づくりの視点と方法』鳳山社.)
- 松村岐夫, 1972, 「都市行政における近隣 (Neighborhood) ——アメリカにおける住民参加の理論と実際」『都市問題』東京市政調査会.
- 内藤辰美, 2011, 「ウッドローンとウッドローン・オーガニゼーション——都市再開発をめぐる黒人と白人」『松山大学論集』第23巻2号.
- 内藤辰美・佐久間美穂, 2015, 「アメリカニゼーションとR.E.パークのRace Relations Cycles論——国家の理念と社会学」日本女子大学社会福祉学会『社会福祉』第56号.
- , 2017, 「レスター・フランク・ウォードとソシオクラシー——日本における民主主義の再生を求めて」日本大学社会学会『社会学論叢』第190号.
- O’Brien, D. J., 1975, *Neighborhood Organization Inter-Group Processes*, Princeton Univ. Press.
- Park, R. E., 1950, *Race and Culture: Essays in the Sociology of Contemporary Man*, Free Press.
- Park, R. E. (= 笹森秀雄訳), 1978, *The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment* (「都市——都市環境における人間行動のための若干の示唆」鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房.)
- Park, R. E. and Burgess, E., 1921, *Introduction to the Science of Sociology*, Univ. of Chicago Press.
- Rose, S. P. (= 田村明訳), 1975, “Saul Alinsky and his Critics,” July 20 Spiegel (ed), *Citizen Participations in Urban Development* (= 『市民参加と都市開発』鹿島出版会.)
- 笹森秀雄, 1987, 「シカゴ学派の衰退と再生」鈴木 広・倉沢 進・秋元律郎編著『都市化の社会学理論——シカゴ学派の展開から』ミネルヴァ書房.
- Sherard, D. & Muray, R. C. in, Spiegel, H. (ed) (= 田村明訳), 1975, *Citizen Partici-*

- pation in Urban Development* (=『市民参加と都市開発』鹿島出版会.)
- Small, A. & Vinsent, G. E. 1890, *An Introduction to the Study of Society*, Colby Univ. Press.
- Suttles, G., 1968, *The Social Order of the Slum*, Univ. of Chicago Press.
- , 1972, *The Social Construction of Communities*, The Univ. of Chicago Press.
- Suttles, G. and Janowitz, M., 1979, “Metropolitan Growth and Democratic Participation, Hawley, A. H. (ed), *Societal Growth: Processes and Implication*, The Free Press.
- Steward, J. H., 1955, *Theory of Culture Change: the methodology of multilineal evolution*, Univ. of Illinois Press.
- Wolf, A. (=杉本正哉訳), 1982, *America's Impasse: The Rise and fall of the Politics of Growth*, Rondon House (=『現代アメリカ政治の軌跡』日本経済新聞社.)
- Wirth, L. (=高橋勇悦訳), [1965] 1978, *Urbanism as a Way of Life* (=「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房.)
- Zukin, Sharon. (=内田奈芳美・真野洋介訳), 2013, *The Death and Life of Authentic Urban Place* (=『都市はなぜ魂を失ったか——ジェイコブズ後のニューヨーク論』講談社.)